

令和元年度 自己点検報告書

人間文化研究機構
国際日本文化研究センター

目次

I. 国際日本文化研究センターの研究目的と特徴	1
II. 令和元年度の取組状況	
1. 研究活動	
(1) 共同研究	1
(2) 人間文化研究機構「基幹研究プロジェクト」	3
(3) 研究成果の公開・発信	3
2. 研究協力活動	
(1) 「国際日本研究」コンソーシアム	4
(2) 研究者等の受入・派遣	5
(3) シンポジウム・ワークショップ	5
(4) 国内関係諸機関との連携・協力	6
(5) 海外関係諸機関との連携・協力	6
3. 資料等の共同利用	6
4. 教育・人材育成	
(1) 大学院教育への協力	7
(2) 人材育成	7
5. 社会との連携	
(1) 講演会等	7
(2) 展示等	8
(3) その他の活動	8
6. 業務運営	9

I. 国際日本文化研究センターの研究目的と特徴

《研究目的》

国際日本文化研究センター（以下「日文研」という）は、大学共同利用機関として、日本文化に関する国際的・学際的な総合研究と世界の日本研究者に対する研究協力、支援を行うことを目的としている。

《役割・特徴》

- ① 日文研は、国際的・学際的・総合的な観点から、日本文化に関する研究課題を設け、国内外のから参加する様々な分野の研究者による共同研究に取り組んでいる。
- ② 共同研究は、「重点共同研究」、「国際共同研究」、「基幹共同研究」という3領域のもとに、柔軟な組織・運営により推進している。
- ③ 世界各地の日本文化の研究者・研究機関に、研究情報を発信するとともに、実情に応じた研究協力を行っている。
- ④ 研究成果は、和文・英文による図書・学術雑誌、講演会、シンポジウムなど様々な形で広く国際社会に提供している。
- ⑤ 総合研究大学院大学文化科学研究科国際日本研究専攻・博士後期課程では、次代の研究者養成に努めている。また、特別共同利用研究員制度のもとで受け入れた他大学在籍の大学院生、さらに留学生にも、指導を行っている。

II. 令和元年度の取組状況

1. 研究活動

(1) 共同研究

日本文化に関する国際的及び学際的な総合研究を、国内外の研究機関、研究者と協力し、計画どおり実施した。具体的には、活動の基幹をなす共同研究として、上述の制度設計に従い、外国人研究員の参画も得て、以下のとおり20件実施した。

また、先述の20件のうち、国外公募による共同研究を2件、公募による客員教員及びセンター専任教員が共同代表となる共同研究6件（うち、「国際日本研究」コンソーシアム会員機関所属研究者と本センターの研究者が共同して代表を務める共同研究3件）を実施している。

さらに、令和元年度には、共同研究院の公募により、計3名（国内2名、海外1名）を採択した。

[令和元年度共同研究]

領域	研究課題	研究期間	備考
重点共同研究	投企する古典性—視覚／大衆／現代	2016. 4～2020. 3	
	「運動」としての大衆文化	2017. 4～2020. 3	
	音と聴覚の文化史	2017. 4～2020. 3	
	応永・永享期文化論—「北山文化」「東山文化」という大衆の歴史観のはざままで—	2018. 4～2021. 3	国内公募
	大衆文化と文明開化：幕末から明治への激動期における大衆メディアの位置及び役割	2019. 7～2020. 6	国外公募
	マス・メディアの中の芸術家像	2019. 4～2020. 3	国内公募
国際共同研究	差別から見た日本宗教史再考—社寺と王権に見られる聖と賤の論理	2016. 4～2020. 3	
	身体イメージの想像と展開—医療・美術・民間信仰の狭間で	2018. 4～2021. 3	
	東アジアにおける哲学の生成と展開—間文化の視点から	2019. 8～2020. 7	国外公募
	近代東アジア文化史の再構築 I—19 世紀の百年間を中心に	2019. 4～2020. 3	
	帝国のはざまを生きる—帝国日本と東アジアにおける移民・旅行と文化表象	2019. 4～2020. 3	コンソ公募
基幹共同研究	比較のなかの東アジアの王権論と秩序構想—王朝・帝国・国家、または、思想・宗教・儀礼—	2016. 4～2020. 3	
	多文化間交渉における「あいだ」の研究	2016. 4～2020. 3	
	近代東アジアの風俗史	2017. 4～2020. 3	
	「かのように」という原理で形成してきた文通—「文書」概念や、その様式、記号、表象、意図性	2019. 4～2022. 3	
	縮小社会の文化創造：個・ネットワーク・資本・制度の観点から	2019. 4～2022. 3	
	文明としてのスポーツ／文化としてのスポーツ	2019. 4～2020. 3	
	東アジア冷戦下の日本における社会運動と文化生産	2019. 4～2020. 3	コンソ公募
	近代日本思想を読み直す：次世代への知の継承・刷新のためのツール開発-21 世紀の国際的視野に立った学際的・総合的・批判的研究	2019. 4～2020. 3	コンソ公募
	「日本型」教育文化を問い直す—新たな人間形成論をめざして	2019. 4～2020. 3	国内公募

共同研究の成果として、「11 世紀日本対謝霊運的認識及評価差異」（『日語学習と研究』掲載、中国語）等、計 13 本の研究論文を公開、また、共同研究報告書として『映しと移ろい—文化伝播の器と蝕変の実相』、『戦後日本再考』等 3 冊を刊行した。特に共同研究「植民地帝国日本における知と権力」の成果として平成 30 年度に刊行した共同研究報告書『植

民地帝国日本における知と権力』が韓国の *The Review of Korean Studies* で紹介され、国際的にも注目された。

(2) 人間文化研究機構「基幹研究プロジェクト」

基幹研究プロジェクトは、人間文化研究機構が第3期中期目標期間（2016年度～2021年度）に掲げるプロジェクトである。国内外の大学等研究機関や地域社会等と組織的に連携する新たな研究システムの構築により、現代的諸課題を解明し、人間文化の新たな価値体系の創出を目指します。日文研では基幹研究プロジェクトとして、以下の3研究プロジェクトを実施した。

1) 機関拠点型基幹研究P J

課題名：大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出

2) 広領域連携型基幹研究P J 「異分野融合による「総合書物学」の構築」

課題名：文化・情報の結節点としての図像

3) ネットワーク型基幹研究P J 「日本関連在外資料調査研究・活用事業」

課題名：プロジェクト間連携による研究成果活用

機関拠点型基幹研究プロジェクト「大衆文化の通時的・国際的研究による新しい日本像の創出」（以下、「大衆文化プロジェクト」）において、京都国際マンガミュージアムとともに、メキシコの漫画文化であるイストリエタの歩みとその世界を紹介する展示「知られざるメキシコの大衆漫画「イストリエタ」展—民族文化としての漫画表現—」を共催した。会期内にはシンポジウムや番組配信を行うなど、民衆史の側面からマンガを研究した研究成果を公開した結果、観覧者数は35,483名に達した。

その他、大衆文化プロジェクトでは、各班の融合とその強化を図るため、班を横断する合同研究会の開催、及び研究叢書及び教科書『日本大衆文化史』（仮）制作のための研究会を実施し、その刊行を具体的に進めた。

広領域連携型基幹研究プロジェクトにおいては、当該ユニットメンバー監修による展覧会「女・おんな・オンナ—浮世絵にみる女のくらし」（於：渋谷区立松濤美術館）を開催し、来場者は9,607名にのぼった。

(3) 研究成果の公開・発信

出版物の充実をはじめとして、多様な方法を用いて、研究成果を広く国内外に公開・発信し、研究の促進をはかるとともに社会への貢献に努めた。具体的には以下のとおり研究成果を出版した。

- 1) 『日本研究』（日本研究に関する国際的な学術雑誌で、応募資格を問わない。査読のう え掲載。オンデマンド出版。）2冊（第59、60集）

- 2) *Japan Review* (日本研究に関するオリジナルな研究成果を収録した英文学術雑誌で、査読のうえ掲載。) 1冊 (No. 34)
- 3) 日文研叢書(日文研における事業、研究教育活動の成果を、論文および貴重資料集成等として発表する。外部出版もあり。) 1冊 (第58集:躍動する「国体」笈克彦の思想と活動)
- 4) Nichibunken Monograph Series (日文研における研究活動の成果で、書き下ろし単著学術論文からなる英文モノグラフシリーズ。) 1冊 (No. 21: *Sentiment, Language, and the Arts: The Japanese-Brazilian Heritage*)
- 5) 世界の日本研究(世界の日本研究の動向や海外研究交流室主催のシンポジウム報告等の不定期出版物。) 1冊 (世界の日本研究 2019)
- 6) 共同研究成果報告書(日文研が主催した共同研究で発表・討議された内容を収録した報告書で、商業出版される。執筆者は研究発表者、代表者等) 3冊 (『映しと移ろい』、『戦後日本文化再考』、『日本語「起源」論の歴史と展望』)
- 7) 『日文研』(年2回発行する和文広報誌で、昭和63(1988)年創刊。専任教員、外国人研究員等のエッセイ、研究活動、研究協力活動の報告、共同研究会の記録等を収録) 2冊 (No. 63、64)
- 8) *NICHIBUNKEN NEWSLETTER* (年2回発行する和英併記の広報誌で、昭和63(1988)年創刊。日文研に関係する研究者のエッセイ、日文研フォーラムや木曜セミナー、イブニングセミナー等の活動状況を収録。) 2部 (No. 99、100)

また新たに、大正・昭和期の国民的地図絵師・吉田初三郎、および彼の影響のもと同時代の絵師が描いた鳥瞰図資料をオンライン・データベース(「吉田初三郎式鳥瞰図データベース」)として公開し、共同利用及び一般利用に供した。

2. 研究協力活動

(1) 「国際日本研究」コンソーシアム

「国際日本研究」や「国際日本学」を掲げた大学(主に大学院課程)・研究所を連携させる我が国初の試みとして、「国際日本研究」の学問的あり方を追求するシンポジウムなどを開催するとともに、海外の日本研究関係の大型学会にコンソーシアム会員機関の教員でパネルを派遣したり、若手育成のために大学院生を送ったりする事業を進める。これによって、コンソーシアムを媒介としながら、国内研究者コミュニティを本センターの持つ海外研究者ネットワークと結びつけることをめざし、平成29年9月に発足した。

令和元年10月1日付けで広島大学文学研究科が正会員として新たに加入し、会員機関数は正会員14機関、準会員3機関となった

令和元年度には、「国際日本研究」コンソーシアム事業として国際ワークショップ(於:大阪大学、74名参加)を開催したほか、「環太平洋学術交流会議」(於:国際日本文化研究センター)を開催し、国内外から集まった約20名の研究者が「国際日本研究」の更なる

深化をめざして議論を交わし、日本研究に取り組む大学等研究機関の研究力・教育力の強化に寄与した。

また、タイにおいてチュラロンコン大学文学部東洋言語学科日本語講座との共催でサマーセミナーを実施し、日本及びタイの大学院生 33 名を含む 64 名が参加した。本取組により、国際日本研究における次世代育成に寄与した。

(2) 研究者等の受入・派遣

外国の研究機関との関係構築を図り、以下のとおり外国人研究者の招へい、国内研究海外派遣を進めるとともにシンポジウム等の開催や参加を積極的に支援した。

- ・外国人研究員 20 名、外来研究員 26 名を受け入れた。
- ・複数の共同研究会に配置された海外共同研究員（アメリカ、イタリア、ニュージーランド、ベトナム、韓国、中国等）を本センターで行う共同研究会に招へいし、研究発表等を通じて、国際的な共同研究会を実施した。
- ・専任教員を海外の日本研究機関等に派遣し、日本文化研究に関する国際的なネットワークの拡大と深化を行った。
- ・英国芸術・人文リサーチカウンシル（AHRC）との学術交流協定に基づき、1 名を受け入れた。
- ・特別共同利用研究員として、全国の大学から 10 名の大学院生を受け入れた。

(3) シンポジウム・ワークショップ

- ・大衆文化研究プロジェクト・MANGA1abo 最先端メディア論講座シリーズ 1・公開ワークショップ

期日：令和元年 8 月 5 日（月）

場所：国際日本文化研究センター

参加者：約 50 名

- ・近世班 令和元年度第 2 回研究会・シンポジウム「怪異・妖怪研究の新時代—日研共同研究を礎に—」

期日：令和 2 年 1 月 11 日（土）

場所：国際日本文化研究センター 第 1 共同研究室

参加者：59 名

- ・第 26 回日研海外シンポジウム

期日：令和 2 年 2 月 13 日（木）～15 日（土）

テーマ：On the Heritage of Postcolonial Studies : Translation of the Untranslatable

場所：The Cornell Club-New York（ニューヨーク・米国）

（独）日本学術振興会の二国間交流事業（共同研究・セミナー）に採択され、日文研海外シンポジウム「On the Heritage of Postcolonial Studies: Translation of the Untranslatable」をコーネル大学・ニューヨークに於いて開催した。若手研究者9名の発表も含め、非常に活発な議論が交わされる学術交流の場を提供した。

（４）国内関係諸機関との連携・協力

令和元年10月2日付で京都精華大学と学術交流協定を締結し、当該協定に基づき、令和元年11月10日に京都国際マンガミュージアムに於いて、講演会「コミックからアニメーションへ、そしてその逆 アメリカから日本とベルギーへ」を共催したほか、12月には、シンポジウム「メキシコの知られざる大衆漫画「イストリエタ」—民族文化としての漫画表現—」を開催した（於：京都国際マンガミュージアム）。

（５）海外関係諸機関との連携・協力

国内外研究機関との連携深化として、学術交流協定については、ヴェネツィア・カ・フオスカリ大学アジア・北アフリカ研究学科（イタリア）及び清華大学人文・社会科学高等研究所（中国）との協定を更新したほか、ブリュッセル自由大学（ベルギー）及びロンドン大学東洋アフリカ研究学院（英国）と新たに締結した。協定機関である漢陽大学校日本学国際比較研究所との共同学術シンポジウム「日本資本主義の精神」を開催したほか、チェコ科学アカデミー東洋研究所にて開催された日本・チェコ交流100周年記念プレ・シンポジウム「Crossing Borders: Past and Future of Japanese Studies in the Global Age」にて発表を行うなど、派遣・受入れの人材交流をおこなった。

3. 資料等の共同利用

外書（外国語で書かれた日本の記録・研究文献）1,581冊、風俗画資料33点及び映像・音響資料271点を収集して共同利用に供した。

また、共同利用に供している各データベース（「撰関記古記録」、「海外邦字新聞」、「日本関係欧文貴重書」、「中世禅籍テキスト」、「艶本資料」、「古事類苑全文」、「近世期絵入百科事典」、「浮世絵芸術」）のコンテンツを拡充し、『怪異・妖怪画像データベース』については3,232件、『艶本資料データベース』については4,859件、『古写真データベース』については4,399件、『風俗図会データベース』については4,286件のアクセスがあった。

さらに、令和元年度には新たに、大正・昭和期の国民的地図絵師・吉田初三郎、及び彼の影響のもと同時代の絵師が描いた鳥瞰図資料をオンライン・データベース（「吉田初三郎式鳥瞰図データベース」）を公開し、令和元年度には、53件のデータベースを一般公開（一部利用申請が必要）して共同利用に供した。

平成29年度よりOCLC WorldCat（国際的な書誌・所蔵データベース）へ参加し、図書館

所蔵資料の書誌・所蔵情報（約 56 万冊分）を登録している。今年度も追加データ約 8,000 件を登録した。また、OCLC の相互貸借・文献複写サービスである OCLC WorldShare ILL にも参加しており、日本語資料を必要とする海外の図書館に対する所蔵資料の貸出、文献複写等により研究支援を行っている。

4. 教育・人材育成

(1) 大学院教育への協力

総合研究大学院大学文化科学研究科の基盤機関として、国際日本研究専攻の大学院生に対して、教育研究の場を提供している。国際性・学際性を備えた研究を進められるよう多面的な指導を行うため、複数教員指導体制を実施し、授業科目「学際研究論（共通必修科目）」においてのべ 16 名が履修した。実践的技能を取得させるため総研大生の共同研究への参加も推進し、計 12 名が参加した。

(2) 人材育成

英国芸術・人文リサーチカウンシル（AHRC）との学術交流協定に基づき、イギリスから若手研究者 1 名を受け入れた。

特別共同利用研究員として、大学院学生のうち日本文化及びこれに関連する分野の専攻者を全国の大学から 10 名受け入れ、専門的研究指導を行った。

前年度の中国に続き、大衆文化研究に関わる教育パッケージの提供しに関して国際的な視点をを得ることを目的に、パリ第 7 大学及びフランス国立東洋言語文化学院との共催でアカデミック・プログラム「大衆文化研究国際ワークショップ・シリーズ講座 in パリ」（後援：国際交流基金）を実施した。本アカデミック・プログラムには、延べ 356 名の研究者及び大学院生が参加し、海外における日本研究の拡大・深化に貢献した。

5. 社会との連携

(1) 講演会等

令和元年度は、日文研講堂改修のため、一般公開に代わるイベントとして、特別公開シンポジウム「天皇と皇位継承—過去と未来の視座」を京都学・歴彩館と共催した。中西進（日文研名誉教授）、磯田道史（日文研准教授）、倉本一宏（日文研教授）、ジョン・ブリー（日文研教授）、君塚直隆（関東学院大教授）が登壇し、約 400 名の参加を得た。

また、研究活動情報の発信を目的に、「日文研フォーラム」（於：ハートピア京都 3 階大会議室、平成 31 年 4 月 9 日、令和元年 6 月 14 日、7 月 5 日、9 月 13 日、11 月 20 日、1 月 14 日、2 月 14 日）、公益財団法人国際文化会館との「日文研・アイハウス連携フォーラム」（於：公益財団法人国際文化会館講堂、令和元年 6 月 5 日、11 月 22 日）を開催した。

(2) 展示等

大衆文化プロジェクト「アカデミック・プログラム」の一環として、「映画「旗本退屈男」幻の衣装展」(パリ日本文化会館、東映太秦映画村、東映株式会社及び国立歴史民俗博物館と共催)を開催した。展示に合わせ、映画上映や教員のフランス語によるプレゼンを実施し、観覧者3,478名を得て、研究資源・研究成果の発信に寄与した。

また人間文化研究機構では、大学等研究機関と連携して、博物館および展示を活用して各研究機関の最先端研究を可視化することで、研究の高度化と新たな研究領域の創成を図る研究推進モデル「博物館・展示を活用した最先端研究の可視化・高度化サイクル」を構築している。

日文研でも、この事業の趣旨にのっとり、学際的・国際的な日本研究の社会還元に努め、以下のような展覧会を開催した。

- ・展覧会「草の根のアール・ヌーヴォー：明治期の文芸雑誌と図案」

期 日：令和元年10月28日(月)～11月22日(金)

場 所：京都工芸繊維大学美術工芸資料館 1階

主 催：国際日本文化研究センター、京都工芸繊維大学美術工芸資料館

後 援：みんなのミュシャ京都展実行委員会

協 力：ミュシャ財団、河瀬満織物株式会社

来場者：663名

- ・展覧会「メキシコの知られざる大衆漫画「イストリエタ」－民俗文化としての漫画表現」

期 日：令和元年12月7日～令和2年2月25日

場 所：京都国際マンガミュージアムギャラリー4

主 催：国際日本文化研究センター、京都国際マンガミュージアム

観覧者数：35,483名

当該共同企画展においては、「ニコニコ美術館@京都マンガミュージアム」を生配信し、8,594名が視聴した。当該展示は、朝日新聞や京都新聞のほか、ラジオ番組(KBS京都)にも取り上げられた。

(3) その他の活動

その他の活動として、セミナー形式の講習会「基礎領域研究」を一般に開放して実施し、社会人を対象とした学び直し、スキルアップの機会を提供した。

また、近隣の小学校に5名の教員を派遣し、資料やスライドを利用して児童に分かりやすく研究活動を紹介する出前授業を行った。1学年全体を対象とした講演会形式での授業も併せて実施した。

令和元年9月19日実施の第41回西京自衛消防訓練大会に参加し、自主防火体制の強化及び自衛消防力の向上に努めた。

プレスリリースを随時発信するとともに、報道関係者との懇談会を6月5日、10月2日、3月4日の計3回（報道関係参加者数延べ74名）開催した。共同研究をはじめとした研究活動の紹介及び各種催し物の案内など情報提供・意見交換を行い、最新の研究成果を積極的に発信した。

6. 業務運営

所長を中心とした執行部及び部課長会議において、新型コロナウイルス感染症対応について検討を行い、対応フローチャートを作成、更新情報については随時所内に周知した。また、感染症拡大防止のため、時差勤務制度、在宅勤務制度及び在宅勤務実施時の情報セキュリティの取扱いを制定するとともに、ICT環境整備を早急に進めた。

新規導入や更新時の設備機器選定時における機種選択プライオリティとしては常に省エネルギー機器を上位とした。また設備長寿命化と改修コスト削減を目指し、不良設備の早期発見と迅速改修をモットーに日常機器整備を実施した。さらに、契約形態や契約方法の見直しに伴って、ガス使用料が対前年度比で約20%以上削減できた。

令和元年度より Google Analytics を導入し、より効率的で効果的な情報発信に向けてデータ収集を行っている。また、11月から日文研公式 YouTube チャンネルを開設し、所員の研究紹介動画を掲載した。SNS との広報連携により、インタラクティブな相乗効果が期待できる。

特別公開シンポジウムにおいては、従来のハガキのみではなく、ウェブにより参加応募を受け付けたことにより、幅広い年齢層（特に若年層）から応募をいただくことができた。また、京都学・歴彩館との共催により、日文研だけではできない効果的な広報（地下鉄へ掲示等）が実施でき、約2.5倍の倍率と盛況だった。当該シンポジウムの様子は、新聞にも取り上げられ、日文研公式 YouTube チャンネルにも掲載した。